狂気に陥る女
――「奇怪な再会」論――

陳　玲

はじめに

「奇怪な再会」は大正 10（1921）年、1 月 5 日から 2 月 2 日まで、『大阪毎日新聞』夕刊に連載されて、同年 3 月に『夜来の花』（大 10.3、新潮社）に収録された作品である。執筆中、中西秀男宛の手紙に芥川自身が「奇怪な再会」を「怪談」と規定している[1]。初期の先行論では、他作品との関連性を指摘されることが多かった。近年の研究では、怪奇推理小説という立場から展開する論と物語の構造に着目した論も注目される[2]。また、ポストコロニアリズムとジェンダーの視点から考察する先行論も見られる。例えば、孔月はお蓮の狂気に着目し、日本帝国主義のオリエンタリズムによる差別表象としてのお蓮の狂気の両義性、特に植民地言説としての喩の意味を明らかにし、この小説を「国家と国際関係、そして民族としての他者に対する鋭い観察を踏まえた、支配的イデオロギーに対抗する先鋭性を帯びている」[3]ものとして評価している。孔は「植民地支配への危険な道を辿っていく帝国日本の危険性を、作者芥川はこのテクストで征服しやすい対象としての「女」というレトリックを使用し、脳病（分裂病）という隠喩を用いて暴いている」と述べている[4]。それに対して、ジェンダーの視点から「狂気」と「女性性」の結びつきに着目したのは姚紅である。姚紅は小説内の男性の発言や眼差しに焦点をあて、お蓮の身体性と精神性の両者にわたって抑圧された中国人としてのアイデンティティと彼女の精神崩壊との関係を分析することによって、この小説を「帝国男性を眼差しの主体、半植民地の中国女性を表象されるだけの受動的な対象物とする」ものと位置づけ、「中国女性の悲劇が帝国男性の視覚的快楽と欲望的快楽と成り得ている」と結論づけている[5]。これらのジェンダーとポストコロニアリズムの視点で考察した先行論は、いずれもお蓮あるいはお蓮に重ねた「支那」の他者性を指摘して、お蓮の受けた抑圧の面については詳しく論じた。ところが、お蓮自身にとっての「狂気」の意義は何物であろうか、お蓮の主体性の面に関してはまだ見落とされている。

本論では、以上の先行論が見落とした部分に焦点を当てて、お蓮の発狂の経緯について分析を行い、お蓮の「身体」を視野に入れながら、その主体性はど

のように表現されるか、お蓮という中国人元娼婦へ向けた芥川のまなざしについて考察する。

1 お蓮の生きる現在

この小説において、お蓮が狂気に陥るという結末が設定される。彼女の発狂の経緯について、先行論文はお蓮がすでに日本にいるようになった時期から分析し始め、発狂する理由を日本で受けた抑圧にあると理解する。例えば、姚紅の論においては、「お蓮の狂気は帝国男性権力側による強制の結果である」[6]と述べられている。これに異論はないが、本論では、お蓮の発狂の経緯をさらに過去に遡って、彼女が中国にいて娼婦であった時期、さらに娼婦になる前の時期まで振り返って見ることにする。すなわち、日本にいる時期と中国にいる時期とを分割して見るのではなく、お蓮の生きる現在を過去の延長線にあると見ておきたい。お蓮の物語が彼女は日本軍人の妾として、「政治的・性的に支配され」[7]、二重の抑圧を受けて、結局発狂するというように解釈できる。その一方、彼女が一人の女として、さらに半植民地の女として家父長制社会で生きていくことに出来る限りの努力を示したが、結局失敗し、現実世界に絶望し、さらに放棄して、男性たちが異常視する狂気の世界に入っていくお蓮の物語と解釈できるのではなかろうか。結論から先に書いてしまうと、この作品を、女であるために努力だけでは叶わない現実によって挫折し、狂気に陥った女の物語としてとらえ、「女性と狂気」というキーワードから読み解いていきたい。

本論はお蓮の過去と現在を結びつけ、彼女の発狂の経緯を分析していくが、物語の大半を構成するお蓮の日本にいる時期に重点を置きたい。では、まずこの部分から分析してみよう。

1.1 お蓮に纏わる環境と心境

お蓮が妾宅に囲われたのは、冬であった。妾宅は「極く手狭な平屋」で、周りは「町らしくな」く、藪や林があるという自然に乏しくなかったところである。旦那の来ない夜は静かである上、寂しい。目の悪い雇い婆さんとランプの火を守りながら、「気味悪そう」に会話をする時がある。旦那はよく妾宅にくるが、滅多に泊まっていくことがない。寒い季節に、町と離れている狭い平屋に囲われていて、旦那以外に訪れてくる人がいないと思われる寂しさに覆われる女が描かれている。

お蓮は日本人ではなく、中国の山東省威海衛のある妓館で売春をしていて、妾にされるため日本に連れてこられた中国人元娼婦である。彼女は昔の生活と友人の顔を思い出すと、母国を離れ、「遠い他国に流れて来た彼女自身の便りなさが、一層心に沁みるような気が」する。言葉や慣習など文化の違いから生じる独特な異国での寂しさ、孤独感、また不安感がここに描写されている。

さらに、このような孤独感に覆われているお蓮は自己疎外と格闘しなければならない。異国男性の快楽に奉仕するために、「丸髷」に結って、着物を着て、「お蓮」と日本風の名前に改名してひっそりと暮らさざるを得なかった。つまり、自分の中国人としてのアイデンティティさえ奪われてしまうのである。

このようにお蓮はまるで孤児のようになる。現実世界において、わずか過去と結び付けられるのは昔に使った品物と記憶しかない。それ以外、お蓮は昔から断絶されている。では、このような殆ど昔と隔絶しているお蓮に纏わる対人関係はどうであろうか。

1.2 お蓮に纏わる対人関係

1.2.1 お蓮と牧野

牧野はお蓮の旦那で、彼以外には殆ど妾宅を訪れる者はいない。

> 旦那の牧野は三日にあげず、昼間でも役所の帰り途に、陸軍一等主計の軍服を着た、逞しい姿を運んで来た。（中略）
>
> 牧野は始終愉快そうに、ちびちび杯を嘗めていた。そうして何か冗談を云っては、お蓮の顔を覗きこむと、突然大声に笑い出すのが、この男の酒癖の一つだった。
>
> 「いかがですな。お蓮の方、東京も満更じゃありますまい。」
>
> お蓮は牧野にこう云われても、大抵は微笑を洩らしたまま、酒の燗などに気をつけていた[8]。

その「愉快」な笑いの背後には、牧野＝日本帝国の男性、お蓮＝中国の女性という二項対立の構図が認められ、日本帝国男性が劣等国の女性に対して力を持つという優越感が読み取れると先行論文は指摘している[9]。しかし、このような構図は必ず成立するとは言えない。牧野に面して、お蓮は「大抵は微笑を洩らしたまま、酒の燗などに気をつけ」る。つまり、言葉ではなくただの微笑であって、お蓮はほかの作業に気をつけるばかりである。中国人女性として牧野

の妾になっても、彼女は必ず彼に迎合するのではなく、答えるよりも相槌もろくに打たずに牧野を受け流している。この行為によって、彼からの問いかけから逃れてしまう。このお蓮の身振り（身体）及び彼女の表情は、牧野への抵抗の道具になっていると考えられないだろうか。つまり、お蓮の協力せずという行為によって、問/答、権力者/被抑圧者という構図が破られてしまう。牧野の優越感も次第に虚無的なものになって、彼の一方的に思い込んだものになるしかない。

さらに、昔の生活と友人を思い出すと、お蓮は「以前よりも、ますます肥って来た牧野の体が、不意に妙な憎悪の念を燃え立たせる事も時々あ」る。お蓮は従順で、おとなしそうに見えるが、内心では牧野を憎悪する。お蓮の内心は牧野が把握できない部分であるうえ、彼のことを憎悪するとは牧野には思いもつかない感情である。彼の手の届かないところで、お蓮は密かにこのような憎悪の念を持っている。一見すれば、牧野は優越感を持っているようだが、その裏において、彼の優越感を喪失せざるを得ないどころか、お蓮は内心に彼に対する不満と抵抗をずっと孕んでいる。

1.2.2 お蓮と田宮

牧野以外に、二回も妾宅に足を運んでくる田宮という人物がいる。お蓮に魅了されずにいられないのは牧野一人だけでなく、田宮もその中の一人である。

> 「（中略）だがね、牧野さん。お蓮さんに丸髷が似合うようになると、もう一度また昔のなりに、返らせて見たい気もしやしないか？」
> 「返らせたかった所が、仕方がないじゃないか？」
> 「ないがさ、――ないと云えば昔の着物は、一つもこっちへは持って来なかったかい？」
> 「着物どころか櫛簪までも、ちゃんと御持参になっている。いくら僕が止せと云っても、一向御取上げにならなかったんだから、――」
> 牧野はちらりと長火鉢越しに、お蓮の顔へ眼を送った。お蓮はその言葉も聞こえないように、鉄瓶のぬるんだのを気にしていた[10]。

お蓮は帝国男性から「見られる性」として、つまり男性の性的欲望を煽る対象としてのメタファーになっていると先行論が指摘している[11]。そういう指摘は正当だと思われる。しかし、見られる立場に立つしかないお蓮は見られるままに何もしようとしないのだろうか。彼女は決してそのような女ではなかった。

彼女は小犬をからかったり、「聞こえないよう」に、「鉄瓶のぬるんだのを気にし」たりして、相手の言葉に対して言葉では応じない戦略を使って、できる限り見られる場から逃れようとした。つまり、彼女は身体の動作を利用したわけである。実際はその場から逃れられないとしても、せめて精神的な面においてはその場から逃れようと努力をしたお蓮の姿をここで伺うことができよう。

お蓮は、不気味でまったく活気のない妾宅に、妾として囲われ、敗戦国の女として異国で独特な孤独を嘗めて、帝国の男性の快楽に奉仕せざるを得ない立場に立っている。だが、このような現実世界で生きていかざるを得ない彼女は、せめて精神面においてできる限りその場から逃れようと努力を示している。

しかし、恋人である金の夢を見た後、お蓮はこの現実世界で生きていくという人生に次第に絶望していく。

2 過去と現在の狭間

ある日、お蓮は昔の深い馴染みがあった男――金の夢を見た。彼の事を占いに行ったが、東京が森や林にならない限り、つまり、「滄桑の変」という予想もされぬ世の移り変わりがない限り、金と会えないと言われた。現実世界において実現不可能だと思われる占いの結果は、お蓮が密かに抱いていた希望を打ち砕いた。その時点から、お蓮は過去と現実の狭間に立って、動揺し始めた。この「森」という言葉が登場する度、お蓮の精神状態に変化が起きる。しかも、「森」と「小犬」という言葉は、明らかに連結していると思われる。しかし、先行研究においては、「森」についての分析はあまり見られない。本節及び 3 節においては、「森」が如何に「小犬」と関連しながら登場するか、また、その登場によってお蓮の精神状態が如何に変化するのかを分析する。

お蓮の現実世界から逃れたいと、次第に絶望したために陥っていく心象風景は彼女の幻聴や夢（森の夢）の形で表現されているが、彼女が現実世界に絶望する決定的な事件とは、不思議な小犬の死亡事件である。そのため、本節では、「森」及び「小犬」との連結関係について分析をするが、重点を「小犬」に置きたい。

では、お蓮が現実世界を諦めるまでの経過を分析してみよう。

2.1「小犬」の出現――希望が現われる

占いをした日の夜、つまり金と会える希望が打ち砕かれた日の夜、一匹の

小犬が妾宅に現れてくる。お蓮は、「子供のように犬を可愛が」っている。「食事の時にも膳の側には、必ず犬が控えてい」る。「夜はまた彼女の夜着の裾に、まろまろ寝ている犬を見るのが、文字通り毎夜の事」である。小犬を熱心に飼うことによって、お蓮は初めて無邪気な笑顔を見せた。彼女にとって、小犬はただのペットではなく、家族であり友人であり恋人であると解釈できる。昔中国にいた時、これと似ている犬を飼ったことがあるお蓮は完全に小犬に感情を注いでいる。この小犬を通じて昔の生活、遠く離れている母国に接近する機会も得た。小犬を飼っているうちに、お蓮はその犬の目つきが人のような気がするようになり、彼女の眼における小犬は金と重なりあって、別の姿の金のようであった。金と会える希望が打ち砕かれた彼女の心はこの小犬に癒されたであろう。このように、小犬は彼女の過去と現在を結びつける唯一の絆となった。

しかし、牧野は小犬を「不快」と感じ、「忌々しそうに」扱う。その上、「陸軍主計の軍服を着た牧野は、邪慳に犬を足蹴に」するのである。この牧野に対して、小犬は「白い背中の毛を逆立てながら、無性に吠え立て始め」たのであり、激しい反発を示している。ここに、お蓮に対して重要な存在であり、完全にお蓮の心を奪ってしまう小犬は、牧野にとってただのペットではなく、牧野と対等な競争相手まで昇格した。牧野の小犬に対する憎悪には、男の嫉妬が見られるであろう。ただのペットだと思われやすい小犬を昇格させたのはほかでもなく、牧野のお蓮に対する欲望そのものであった。この小犬がお蓮を彼の手から奪おうとする兆しを予感したからと解釈できよう。小犬を見て、「可哀そうに」と言ったお蓮は小犬に自己同一化している。小犬が牧野に対して示した激しい反発は、いつも従順に見えるお蓮の心の中に抑圧された怒りと反抗の爆発だと解釈できよう。

それから数日経ったある夜、牧野とお蓮は近所の寄席に行く。そこでお蓮は日清戦争の幻灯を見た。もちろん幻灯が珍しいゆえ、彼女にとっては興味があるのに違いないが、それ以外画面の景色は彼女の郷愁を慰めてくれたに違いない。帰り道にお蓮は誰かが呼んでいるように感じるが、牧野はそれを「空耳」で、「あんな幻燈を見たからじゃないか」と解釈する。牧野にとって、お蓮の郷愁ゆえの空耳だったのである。しかし、お蓮は小犬と幻燈を通して、次第に過去の記憶に浸って自分をやさしくいたわる。誰かが呼んでいるように感じたのは、お蓮の無意識のうちに過去に戻りたい、国に戻りたい、昔の友人、また金に会いたいという渇望の表れだと考えられる。

その夜、お蓮はたった一人で、暗い藪だか林だかの中を歩き廻っている夢を見た。夢の中で、お蓮は「とうとう私の念力が届いた。東京はもう見渡す限り、人気のない森に変わっている。きっと今に金さんにも、遇うことができるのに違いない」と思い続ける。ここで、「森」が再び登場し（初回登場は占いの時）、お蓮の抑圧された願望がこの「夢」という形で表現される。「東京が森になる」という現実世界で実現不可能なことを夢の中で体験することで、お蓮の抑圧された執着が解放される。その一方、「夢」という無意識の産物として登場する「森」＝お蓮の強い念願は、まだ非現実の枠に囲まれているかもしれないが、お蓮の意識の中で現実/非現実の境界線を越え、現実世界を侵食してくる可能性を暗示しているのではなかろうか。そして、「森」の夢を見た翌日の朝、お蓮と小犬の関係は一層親密となった。

以上分析してきたように、偶然に小犬を飼い始めたお蓮にとって、小犬は彼女の過去と現在を連結する重要な存在となってきていることが分かる。自分の里心が牧野に無視されているからこそ、小犬は地理的、文化的隔たりを超えて、お蓮の現在を過去の延長線に置かせ、まるで金の分身のようにお蓮の精神的な癒しと慰めになっているのである。

2.2 小犬の奇妙な死——絶望に打ちひしがれる

先行研究における小犬についての考察は少なく、動物と怪奇の関係から分析した孔月の論があるのみである。孔は芥川自身の犬にまつわる実体験と関連し、日本昔話や日本の民俗的な犬のイメージを分析し、「作者のまなざしには霊的存在に恐怖を抱く人間心性が伺えるところから「怪談」のために白犬を登場させた」[12]と述べている。本節では、「白犬」を生み出した作家の背景に着目するのではなく、「怪談」の効果を分析するのでもなく、小説の内容に即して、物語の進行に大事だと思われる小犬の死と怪奇な鼻の色の変化に焦点を当て分析し、更にそれが如何にお蓮に影響したかを解明したい。

お蓮と小犬の関係が一層親密となった数日後、田宮という男が訪れてきた。しかし、その翌日、小犬が病みついた。半月後、青い物を吐いて奇妙な死に方をした。お蓮は小犬を自分よりもさらに弱い存在に自己同一化し、それを庇護し、愛玩するのみではなく、すでに戻れない過去と生きざるを得ない現在を結びつける絆としている。この苦悶の現実世界の中で、お蓮を慰めてくれる唯一の存在はこの犬である。小犬が死んでしまうことによって、お蓮はこの現実

世界に生きていく唯一の希望と理由を失った。

> お蓮はそこへ坐ったなり、茫然と犬の屍骸を眺めた。それから懶い眼を挙げて、寒い鏡面を眺めた。鏡には畳に仆れた犬が、彼女と一しょに映っていた。その犬の影をじっと見ると、お蓮は目まいでも起ったように、突然両手に顔を掩った。そうしてかすかな叫び声を洩らした。
> 鏡の中の犬の屍骸は、いつか黒かるべき鼻の先が、赭い色に変わっていたのだった[13]。

茫然と犬の屍骸を眺めるお蓮は犬の死の事実を受け入れ難かったに違いない。鏡の中に映されている屍骸と自分の姿をもう一回確認して、やっと犬が死んだという事実を受け入れた。鏡の中に映されている犬の屍骸は、ありえないはずであるが、鼻の色が黒から赤に変わっていったのである。この犬とお蓮が昔飼っていた犬との唯一の相違点は鼻の色であった。屍骸の鼻の先が黒い色から昔の犬の赤色に変化したことによって、二匹の犬は鏡の中で重なり合って、一匹の犬になる。お蓮の過去は現在に迫ってきて、ついに目の前に現れてきた。唯一の精神的拠を失って、お蓮の心には絶望と同時に、一層過去イメージが甦ってきたことを、この犬の鼻が象徴しているのではないか。お蓮はもう過去にも戻れないし、現在においても生きていけない境地に陥った。現実世界での唯一の絆を失うことによって、お蓮は完全な幻想の世界に追いやられざるを得ない。鏡の中の自分と小犬の死を確信することによって、お蓮は現実世界から遊離したのである。

以上が、鏡の中で変化した犬の屍骸と自分を確認したお蓮の描写から導かれる解釈である。

3 生きる現在の放棄

2 で見たように、お蓮の精神状態が更に不安定になる決定的な事件は小犬死亡事件である。では、お蓮は現実世界、生きる現在に絶望したとすれば、彼女はどこに行けるのか。以下、お蓮が狂気に至るまでの過程を分析してみよう。

3.1 お蓮と本妻

> 暮に犬に死なれて以来、ただでさえ浮かない彼女の心は、ややともすると発作的な憂鬱に襲われやすかった。彼女は犬の事ばかりか、未に分から

ない男の有りかや、どうかすると顔さえ知らない、牧野の妻の身の上までも、いろいろ思い悩んだりした。と同時にまたその頃から、折々妙な幻覚にも、悩まされるようになり始めた[14]。

犬に死なれて、お蓮の幻聴、幻覚が一層深刻な状況になった。彼女が現実世界、生きる現在から脱出しようとする気も一層強くなった。そんな時、お蓮の諦めに拍車をかける二つの事件が起こった。まず、最初の本妻来訪事件を分析してみよう。

噂に聞いていた牧野の本妻が妾宅を訪ねてきた。彼女は嫌味や皮肉を言って、更に「悪丁寧」にお蓮に「御願い」をする。それは「近々に東京中が、森になるそうでございますから、その節はどうか牧野同様、私も御宅へ御置き下さいまし」ということであった。しかし、使用人の「婆さん」の目に映ったお蓮は少しも迷惑した様子がなく、笑いながら「婆さん」に本妻来訪事件を話した。それはなぜであろう。それは占いで言われた「東京が森になる」という本来不可能だったことが本妻によって確言され、このことでお蓮はもうすぐ金と会えると感じたからではなかろうか。その一方、「森」＝お蓮の強い念願は単なる「夢」という非現実的な形で現れるのではなく、実体のない「話」という変形ではあるが、漸く現実/非現実の境界線を超えて、現実世界に登場してきた。ということは、お蓮の精神状態の不安定さが一層深刻になるにつれて、お蓮の強い念願は夢という無意識的な形に託しきれなくなり、徐々に現実世界へと侵入してきたのではなかろうか。そして、この侵入はお蓮の「野生」の蘇生の兆しでもあろう。

お蓮は本妻来訪事件を牧野に話して聞かせたが、牧野は「案外平然」とタバコを吸っている。この「薄情すぎる」牧野の態度に対して、いつも微笑だけを洩らし、静かで温順な彼女は、いつもとは打って変わって、激しい感情を示し憤怒した。

お蓮と本妻が会ったのは一回だけであるが、間接的接触はそれ以外にもある。お蓮が初めて本妻について知ったのは、牧野の右の頬にあった傷の由来を聞くことからである。その夜、お蓮の眼に「見た事のない牧野の妻が、いろいろな姿を浮かべたりした」が、「彼女は同情は勿論、憎悪も嫉妬も感じ」ず、「多少の好奇心ばかりだった」のである。自分の奉仕する旦那の本妻について、お蓮は自分と深い関係のある人間とは考えなかった。しかし、二回目においては、

お蓮の態度は変化した。

「そうすりゃここにいなくとも好いから、どこか手広い家へ引っ越そうじゃないか？」
（中略）
「この家だって沢山ですよ。婆やと私と二人ぎりですもの。」
（中略）
「そうなったら、おれも一しょにいるさ。」
「だって御新造がいるじゃありませんか？」
「嘘かい？嘘とも近々別れる筈だよ。」
（中略）
「あまり罪な事をするのは御止しなさいよ。」[15]

お蓮は牧野が本妻と別れると聞くと、すぐそれを阻止しようとした。彼女には牧野の本妻の位置に取って代わる気はない。自分の妾としての役割以外に、妻として母親としての役割を考えていないのである。つまり、妻として母親としての役割に対する拒絶だと考えられよう。お蓮の過去の経歴と照らして見れば、ここでのお蓮の意図がさらに明らかになる。彼女は継母と争って、自由を求めるため、家から脱出し、自ら身を売って娼婦になった。娼婦になることは、妻として母親としての役割も放棄すると同様である。現在のお蓮は妾の身分に変わっても、特定の男性の所有物として性を提供する役割は変わらない。そういう意味において、彼女はやはり娼婦の延長線に位置づけられよう。しかし、牧野が本妻と別れて、お蓮と一緒になることによって、お蓮はまた家に囲われるばかりではなく、妻としてさらに母親としての役割が押し付けられる恐れが生じてしまう。そして、本妻来訪事件に「平然」としている牧野の態度に対して憤怒したお蓮は、自分が金と会えないという苦痛の経験から、牧野に捨てられる本妻に同情を寄せるのみではなく、自分もいつか捨てられるのではないかという女の運命を予感しており、現実世界で自分の未来が孕んでいる危機を感じ、他人に翻弄される運命の脆さを感じたのではなかろうか。

3.2 野性の蘇生

お蓮の諦めに拍車をかけたもう一つの事件は彼女を日本に密入国させた闇商人の田宮の再訪問である。田宮の話の中から、金が牧野に殺されたということが暗示され、お蓮は牧野を殺そうとする。

「牧野め。牧野の畜生め。」

お蓮はそう呟きながら、静かに箱の中の物を抜いた。その拍子に剃刀の匂が、磨ぎ澄ました鋼の匂が、かすかに彼女の鼻を打った。

いつか彼女の心の中には、狂暴な野性が働いていた。それは彼女が身を売るまでに、邪慳な継母との争いから、荒むままに任せた野性だった。白粉が地肌を隠したように、この数年間の生活が押し隠した野性だった[16]。

お蓮は、昔の「狂暴な野性」が蘇って、牧野を殺そうとしたが、かすかな声が、どこからか彼女の耳に届き、彼女の行動を止めようとした。弥勒寺に行けば、金に会えるということだった。

この声はお蓮の心の中の自己分裂だと考えられる。牧野を殺そうとする自分の行動を止めようとするもう一人のお蓮は、たとえ禁じえない怒りの中、狂暴な野性が蘇っても暴力を振舞わなかった。それはお蓮の善良さによるものだとも理解できるが、その一方、お蓮はすでにこの世を諦めたといえよう。自分の恋人を殺した犯人は自分を日本に連れてきた旦那である。この世と連結する唯一の精神的な絆を破滅させたのは自分の未来を寄託する人であって、この世で生きていく希望を完全に奪い去ったのは牧野である。お蓮は自分の未来を諦めると同時に、この世での自分の居場所も失ってしまうことを覚悟した。

金に会いに行く前、お蓮はいつもより丁寧に化粧し、「芝居でも見に行くように」一番いい着物を着る。不審そうに彼女に声をかけた牧野に対して、お蓮は「冷然」と帯上げを結んでいたのである。そろそろ不安になってきた牧野に対して、「お蓮には何とも云えない、愉快な心もちを唆るのだった」。その上、彼女は「侮蔑の眼の色」を牧野に送りながら、「静かに帯止めの金物を合わせ」て、出かけたのである。お蓮は妾としての身分とふさわしくない態度で牧野を扱っていながら、少しも悪びれる様子はなかった。牧野に何も説明する気なく、気儘勝手に行動をする。この一瞬、お蓮はまた昔の「野性」のある女に変身したのである。彼女は牧野に対する軽蔑を隠さず内心に抑圧した感情をすべて解放した。

そして、弥勒寺橋で植木を見ながら、お蓮は嬉しそうに「森になったんだねえ。とうとう東京も森になったんだねえ」と何度も独り言を呟いていた。つまり、「森」はあたかも目に見えるごとく漸く現実世界に現れたのである。つまり、お蓮の強い念願が漸く現実世界において実現されたのである。それと呼応する

ように、一匹の白犬が人ごみを抜けてお蓮のところにやってきた。

一日か二日すると、お蓮はK脳病院に入った。お蓮は現実世界から完全に遊離した。狂気におかされたことによって、現実世界におけるすべての憎しみ、抑圧、苦痛は現実世界に残されたまま、お蓮と関係がなくなった。お蓮は完全に幻想の世界に入ったのである。

3.3 お蓮の人生

以上、お蓮が日本にいる時期を中心に、彼女の狂気に至る経緯を分析した。では、彼女の生きる現在を過去の延長線に置くことで、彼女の過去の経歴を遡っていけば、お蓮の人生はどのようになるのであろうか。

お蓮は身を売る前からこの世の中で生きていく勇気を示している。彼女は自由を求めるため、邪慳な継母と争った、「野性」のある女であった。継母の手、つまり家から脱出するため、自ら身を売って娼婦になった。すなわちお蓮は妻として母親としての性役割を捨て、個人としての自由を求めた。

娼婦になったお蓮は「賑やかな家」で、「朋輩たち」と一緒に暮らしていた。可愛い白犬を飼い、金という恋人もできた。このような生活は後の寂しくて、心まで病んだ異国生活と比較すれば、少なくとも楽しい部分もあったと言えよう。しかし、娼婦として働くのは一生の職業ではない。尚且つ恋人の消息が急に絶たれ、彼女を娼婦の境地から救い出す牧野という男が目の前に現れた。彼女は危険な海を渡って、牧野に連れられ、妾として異国で新しい生活を始める。しかし、予想とずれ、家に囲われてしまう恐れが生じてしまう。さらに敗戦国の女として、彼女は何重もの抑圧も受けざるを得ないのである。捨てようとした昔はなかなか捨てられない。しかし、すでに戻れない昔と、無理に自分に押し付ける「お蓮」（日本人）というアイデンティティは受け入れられず、慣れない現在との狭間に挟まれお蓮は苦しむ。ようやく昔の可愛がっていた白犬とよく似ている小犬を飼うことによって、ある程度精神的には慰められたが、牧野が嫉妬のゆえ、汚い手を使って再び彼女の大事なものを奪った。絶望の淵に沈められたお蓮がそこから脱出するため、結局狂気の道を選んだ。このように、女として個人の自由を求めたのに、努力だけでは叶わない現実によって挫折し、絶望の果てに現実の世界を放棄して幻想の世界に入ったという女の一生が立ち現れてくるのではなかろうか。

終わりに

ショシャナ・フェルマンは「女性と狂気」において、以下のように述べている。

> 男の側に存在するとされる理性は、女の狂気に相対したとき、それを専有しようとする男はその理性を使って女の狂気を「理解する」のだと言い張るのだが、その理解は表面上のもので、狂った女を見世物としておとしめておいて、男の側が、「理解し、所有する」対象物に還元してしまおうとするだけである[17]。

確かに、この小説に当てはめて見れば、医者の「K」の目に映るお蓮は異常であり、病的現象、すなわち彼女の症状が医学的にあるいは科学的に説明されるだけで、お蓮の境遇、また彼女の執着することについて、「K」はまったく関心を持たない。病院に来たお蓮は「決して支那服を脱がなく」て、「犬が側にいないと、金さん金さんと喚き立てる」「敵国人」の女として「K」の眼に映されており、彼女はまったく見られるばかりの他者になっている。

しかし、芥川は視点を「K」の語りに置くだけではなく、もう一つの視点をお蓮にも置く。男性を誘惑する女でもなく、汚い女でもない、異国での孤独を嘗めながら、何重もの抑圧を受けざるを得ないお蓮像を描く一方、自分の人生を掴むため、いろいろ旅の巡礼をして失敗し、現実世界を諦め、幻想の世界に入ったお蓮像も描いている。お蓮の旅の失敗は、この現実世界において女性が結局宿無しであって、つまり名も居場所もない不安定な地位しか持たぬことを示している。「正気である」女としてのお蓮の生きていた時期は厳冬であった。この厳冬は同時に、彼女にとって極めて厳しい現実世界のことを象徴しているのではなかろうか。冬の後には必ず春が来るごとく、死の後には、確実に新たな生が始まる。それゆえに、冬は再生に至るまでに通過しなければならない過程でもある。厳冬を耐え忍んできたお蓮は、立春になって間もなく狂気の世界に入る。それは、彼女が異世界に入って再生することを象徴するのではなかろうか。

彼女の「狂気」は、牧野の支配と束縛に抵抗し、幻想の異空間において昔の恋人に再会する手段であって、彼女は「狂気」によって、やっと日本帝国の植民地主義から脱出して、また故郷中国の家父長制社会の抑圧から自我意識を回復し、自己主張、解放を獲得して、人間としての再生を表象するものだと言え

るではなかろうか。

注

1　1921 年 1 月 19 日付中西秀男宛の手紙に「「奇怪な再会」と云ふ怪談を書いてゐます」と芥川が自ら述べている。『芥川龍之介全集』第十九巻（岩波書店、1997）
2　例えば、怪奇推理小説という立場から展開する論は、井上諭一「「奇怪な再会」論――怪奇の行方――」『弘学大語文』20（1994）が挙げられる。物語の構造に着目した論は、岡田豊「芥川龍之介『奇怪な再会』への一視点：＜物語＞を物語る「私」の物語として」『駒澤國文』38（2001）と、一柳廣孝「芥川龍之介における＜夢＞・覚書」『名古屋経済大学開学十周年記念論集』（1990）の二つが挙げられる。
3　孔月「芥川龍之介「奇怪な再会」：隠喩としての狂気」『日本語と日本文学』42（2006）：39 頁
4　孔月　前掲論文　39 頁
5　姚紅「「奇怪な再会」論：帝国男性のまなざしをめぐって」『文学研究論集』26（2008）：162 頁
6　姚紅　前掲論文　162 頁
7　孔月　前掲論文　38 頁
8　芥川龍之介「奇怪な再会」『芥川龍之介全集 4』（筑摩文庫、1987）151－152 頁
9　姚紅　前掲論文　175 頁
10　芥川龍之介　前掲書　171－172 頁
11　姚紅　前掲論文　169 頁
12　孔月　前掲論文　31 頁
13　芥川龍之介　前掲書　176 頁
14　芥川龍之介　前掲書　176 頁
15　芥川龍之介　前掲書　173 頁
16　芥川龍之介　前掲書　186－187 頁
17　ショシャナ・フェルマン『女が読むとき　女が書くとき』下河辺美知子訳（勁草書房、1998）53 頁